

かさまのれきし

第83回



浄信筆「惠信尼」肖像および遺書



惠信尼の宝篋印塔

JR水戸線稻田駅の南方三〇〇メートルほどのこんもりとした森に玉日廟があります。ここは親鸞の妻恵信尼の墓所とされています。恵信尼は長らく京都の九条関白兼実の娘である玉日姫と同一人物とされていましたが、今では越後介三善為教の娘であることがわかり別人とされています。親鸞が承元元年(一一〇七)に後鳥羽上皇の念佛停止令に触れて、越後国に流罪

ました。元仁元年(一二三二四)には、浄土真宗の經典『教行信証』を著しました。

親鸞は、嘉禎元年(一二三三五)頃京都に帰ったとされ、末娘覚信尼が付き添いました。恵信尼は稻田草庵に残り、子育てをしながら親鸞の教えを伝え、弘長二年(一二六二)十一月、親鸞が九十歳で没した時、弟子に命じて遺骨を稻田草庵に持ち帰り、お骨堂にお守りしました。その後、恵信尼は父から譲られた越後国の荘園に子どもたちと移住しました。親鸞の没後、末娘覚信尼に手紙を送っていて、召使の少女の譲渡のことや親鸞の思い出、晩年の新潟での生活など十通の手紙が、大正年間に西本願寺倉庫から発見され話題になりました。

大正二年(一九一三)、恵信尼を信奉する大谷派婦人懇話会が西念寺の南一キロメートルほどの地に「玉日君御本廟」の石柱を建立しました。柘植の参道を進み玉日廟の山門をくぐると参拝所があり、その奥に瑞垣に囲まれた宝篋印塔が菩提樹を背に立っています。参拝所の床はきれいに磨かれ、花も飾られていて清々しい気分になります。壁には浄信筆の「恵信尼」肖像と遺書が掲げてあり、恵信尼の命日には、その遺

に処せられた際に恵信尼は越後に同行しました。五

年ほどで流罪が解かれてから、信濃善光寺に参拝し、

上野国佐貫、下野国を経て、常陸国下妻に滞在、その後、笠間の庄司基員のもとに草鞋を脱ぎ、さらに稻田

頼重(宇都宮頼綱弟)の援助を受け、黒木の草庵(西念寺の辺り)に居住しました。親鸞は稻田を拠点として、常陸国北部、鹿島・鉢田方面、利根川流域、霞ヶ浦流域、下野国などに他力本願、阿弥陀信仰を説いていました。元仁元年(一二三二四)には、浄土真宗の經

典『教行信証』を著しました。

親鸞は、嘉禎元年(一二三三五)頃京都に帰ったとされ、末娘覚信尼が付き添いました。恵信尼は稻田草庵に残り、子育てをしながら親鸞の教えを伝え、弘長二年(一二六二)十一月、親鸞が九十歳で没した時、弟子に命じて遺骨を稻田草庵に持ち帰り、お骨堂にお守りしました。その後、恵信尼は父から譲られた越後国の荘園に子どもたちと移住しました。親鸞の没後、末娘覚信尼に手紙を送っていて、召使の少女の譲渡のことや親鸞の思い出、晩年の新潟での生活など十通の手紙が、大正年間に西本願寺倉庫から発見され話題になりました。

書が奉読されています。



玉日君御本廟

稻田大古山木崎台の玉日君御本廟

(市史研究員)

みなみ
南秀利

問 生涯学習課(内線382)